


障害のある子どもたちによる創造的体験

～特別支援学級等での
アーティスト・ワークショップの実践～

特定非営利活動法人
芸術家と子どもたち


「障害のある子どもたち」は、学校教育のどこにいるのか？

日本では2007年に、それまで障害の種類や程度に応じて、
 盲・聾・養護学校や特殊学級といった
 特別な場で手厚い教育を行うことに重点が置かれていた「特殊教育」から、
 一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援を行うことに重点を置いた
 「特別支援教育」へと教育の在り方が変わりました。
 そのため現在、「障害のある子どもたち」には、
 一人ひとりが適切な指導や支援を受けられるよう、
 多様な教育の場が確保されています。
 そして、特別な教育的支援を必要とする子どもの数は、年々増え続けています。

2023年現在
 義務教育段階の全児童生徒数 **941万人** (2013年比で10%減) 

特別支援学校


視覚障害、知的障害、病弱・身体虚弱、聴覚障害、肢体不自由

0.9%
8.5万人
 年々増加
 (2013年比で1.3倍) 

小学校・中学校

□ 特別支援学級


弱視、肢体不自由、自閉症・情緒障害、難聴、
 病弱・身体虚弱、知的障害、言語障害

4.0%
37.3万人
 年々増加
 (2013年比で2.1倍) 

□ 通常学級

通級による指導

弱視、肢体不自由、自閉症、難聴、病弱・身体虚弱、
 学習障害 (LD)、言語障害、情緒障害、注意欠陥多動性障害 (ADHD)

2.1%
19.6万人
 年々増加
 (2013年比で2.5倍) 

「学習面又は行動面で著しい困難を示す」とされた
 児童生徒 **8.8%** 程度の在籍率 ※2022年文部科学省調査

※第46回全国特別支援教育振興協議会文部科学省初等中等教育局特別支援教育課「特別支援教育の充実について」(2024年12月6日)の資料をもとに作成

※「通級による指導」とは、大部分の授業を在籍する通常の学級で受けながら、例えば週1、2回、他の教室で、障害に応じた特別な指導を受けることをいいます。

「障害のある子どもたち」と「芸術家と子どもたち」のこれまでの活動

芸術家と子どもたちでは、2024年度までに延べ498校の特別支援学級や特別支援学校で、9,392人の障害のある子どもたちと共に、プロの現代アーティストによるワークショップを実施してきました。

年度	小学校 特別支援学級及び 通級教室	中学校	特別 支援 学校	計	参加児童・ 生徒数	実施対象	国などの動き
2003 ～ 2010	27校	8校	3校	計38校	計639人	・知的障害・情緒障害 ・肢体不自由・言語聴覚障害	2006年12月：国連総会において障害者 権利条約を採択 2007年4月：特別支援教育の本格実施
2011	32校	3校		計35校	計587人	・知的障害 ・情緒障害	8月：改正障害者基本法施行
2012	40校	5校		計45校	計785人	・知的障害 ・情緒障害 ・肢体不自由 ・言語障害	7月：中央教育審議会初等中等教育分 科会より『共生社会の形成に向けたイン クルーシブ教育システムの構築のための 特別支援教育の推進』の報告書発行
2013	24校	2校		計26校	計413人	・知的障害・情緒障害 ・難聴・言語障害・聴覚障害	4月：障害者総合支援法施行 1月：障害者権利条約批准
2014	26校	4校		計30校	計381人	・知的障害 ・情緒障害 ・肢体不自由 ・言語障害	
2015	24校	5校	2校	計31校	計546人	・知的障害・情緒障害 ・肢体不自由・難聴言語障害	
2016	25校	8校	1校	計34校	計464人	・知的障害 ・情緒障害 ・肢体不自由	4月：障害者差別解消法施行 8月：改正発達障害者支援法施行
2017	23校	3校		計26校	計357人	・知的障害 ・情緒障害 ・肢体不自由	4月：特別支援学校小学部・中学部学 習指導要領等改正の公示
2018	16校	4校	2校	計22校	計381人	・知的障害 ・情緒障害 ・肢体不自由	4月：高等学校等における通級による指導 の制度化 1月：文部科学省 障害者活躍推進プラン
2019	19校	5校	5校	計29校	計543人	・知的障害・情緒障害 ・肢体不自由 ・視覚障害・聴覚障害	9月：文部科学省「新しい時代の特別支 援教育の在り方に関する有識者会議」を 設置（2021年1月報告）
2020	23校	8校	1校	計32校	計801人	・知的障害 ・情緒障害 ・肢体不自由	
2021	20校	7校	5校※	計32校	計697人	・知的障害 ・情緒障害 ・肢体不自由	
2022	29校	8校	2校	計39校	計886人	・知的障害 ・情緒障害 ・肢体不自由 ・聴覚障害	
2023	27校	8校	3校	計38校	計880人	・知的障害 ・情緒障害 ・肢体不自由	4月：こども基本法施行 12月：こども大綱策定
2024	33校	5校	3校	計41校	計1,032人	・知的障害 ・情緒障害	4月：改正障害者総合支援法施行、改 正児童福祉法施行
合計	388校	83校	27校	計498校	計9,392人		

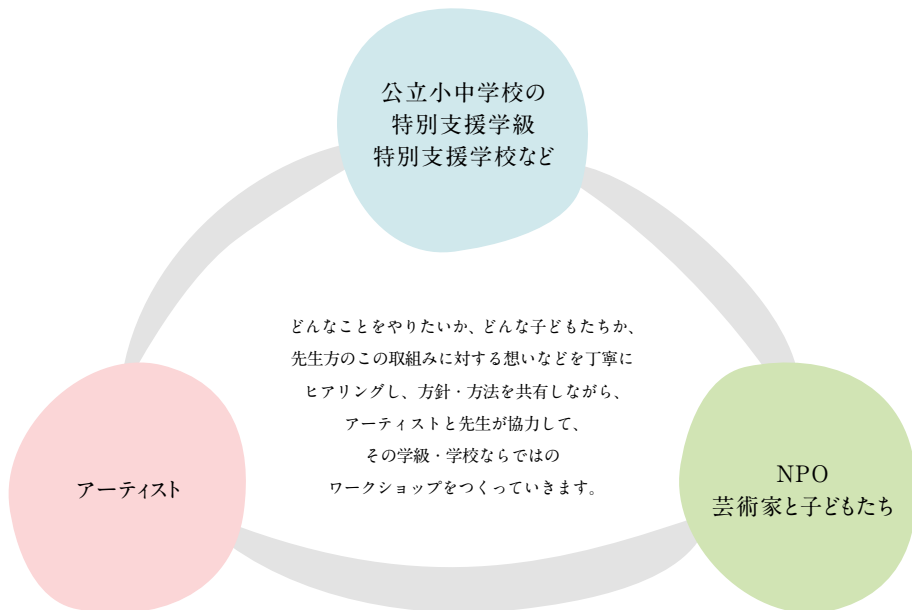
※義務教育学校1校を含む

私たちの取り組み

私たちはこれまで、障害のある子どもたちとの活動の中で、彼らの独創的で刺激的な発想や表現に、アーティストが目を見張り、息を飲み、嫉妬の念すら持ってしまう瞬間に、幾度も立ち会ってきました。

「マイノリティ」として分断され、周囲と馴染めず生きづらさを感じがちな障害のある子どもたちですが、彼らの考え方や行動にふれ、多様な価値観を認め合うことが、新しい表現やコミュニケーションを生むきっかけとなり、そんな独創性を持った彼らこそが、これからの社会を支え、動かしていくのではないかと考えています。

表現とコミュニケーションのプロであるアーティストと一緒に、障害のある子どもたちが集まる場所に出向くこと。私たちはこれからも、子ども一人ひとりが他者との違いを認め合い、そこから一緒に何かを生み出す場をつくっていきます。



活動の特徴

“表現者”として紡ぐフラットな関係

アーティストは、

子どもたち一人ひとりの表現は皆違うという前提に立っています。

違いを認め合う環境が整えば、子どもたちは自然と自分を表現します。

たとえ、その表現が微細な指や目などの動きだけだとしても、

あるいは、独特な発声やとびはねる行為だとしても、

アーティストはその表現の中の変化を見逃しません。

芸術家と子どもたちのワークショップでは、障害の有無とは関係なく、

子どもたち、先生方、アーティストが一人の表現者として向き合い、

フラットな関係を築いていきます。

独特な身体感覚から生まれる表現の豊かさ

障害のある子どもたちは、

その特性ゆえに、独特の身体感覚を有していることがあります。

細部にこだわる子どもが繊細で素晴らしい絵を描いたり、

聴覚の鋭敏な子どもが通常聞こえない周波数の音で身体をゆらしたり…

ワークショップの中でその感覚が

特異な才能として発揮されることがあります。

大事なことは、子どもたち一人ひとり感覚が違うという至極当たり前のこと。

障害の有無に関わらず、“彼らがいま何を感じ取っているのか”を、

丁寧に寄り添って読み解いていくこと。

自分では気づかなかった新しい感覚と出会い、

そこからまた新しい表現が生まれていきます。

実施事例① 身体表現

友達とふれあいながら、言葉を使わない身体でのコミュニケーションを楽しんだり、楽器の音や音楽にのせて思いっきり全身を動かして、心も身体も開放したり…アーティストとともに、様々な身体の使い方や動きを体験しながら、子どもたち一人ひとりが自分の身体、友達の身体と向き合い、自分なりの表現を見つけ、お互いの表現を味わう時間を紡ぐ身体表現ワークショップ。

こんなことをやっています！

アーティストがダンスで自己紹介

教室に入ると、アーティストがダンスで自己紹介！

言葉を使わずとも、見たことのないような動きに、子どもたちの目はくぎ付けに。

時にはアーティストの動きに誘われて、子どもたちの身体が自然と動き始めることも。



身体と心をほぐす

アーティストが即興的に繰り出す動きや言葉を真似してみたり、アーティストと一対一で手を取りあい、ふれあいながら踊ってみたり、身体と心をほぐしていきながら、まずはお互いを知り、関係性を丁寧に築いていきます。

友達と一緒に動いてみよう

2人組になり、「ひじとひざ」など、身体の一部をくっつけてポーズをつくるワークや、一人が手のひらを動かし、もう一方がその手のひらを見つめながら自由に動くワークなどを通して、友達の動きを観察したり、誰かと一緒に動く面白さや心地よさを体感。



身近な素材を使って

まるまったり、ぐしゃぐしゃになったり、アーティストが持つ新聞紙の動きをよく見ながら、その様子を自分なりに身体で表現。大きなポリエチレン膜で波をみんなでつくったり、かまぐらのような形をつくって中に入ったり…様々な道具を介して、子どもたちの動きのバリエーションを広げていきます。



イメージから動きを創作する

「動物」や「モノ」など、アーティストが出したお題に合わせて、個人やグループで自由に動きを考えるワーク。「スローなマリオ」、「おじいちゃんの突撃！」など、時には予想外のお題に頭を悩ませながら、それぞれ直感的に出てきた動きを繋げながら、イメージを身体で表現することに挑戦。



実施事例② 音楽

アフリカの太鼓、口琴、スチールパンなど、
普段ふれる機会があまりないような楽器から、
フライパン、ペットボトル、木の板など、身近なものまで楽器にしながら、
音やリズムを全身で感じて、楽しむ音楽ワークショップ。
友達と音で会話をしたり、言葉にならない「気持ち」をうたにしたり、
音楽を通したコミュニケーションの場をつくっていきます。

こんなことをやっています！

音やリズムに出会う

子どもたちから出てきた言葉を
太鼓のリズムにして演奏したり、
それぞれ興味をもった楽器を自由に鳴らしながら、
音の響きを存分に感じたり、
新しい音やリズムに出会い、全身で味わう時間。



友達との一体感を感じる

自由な即興演奏から、
みんなで息を合わせてピタッと音をとめてみる。
指揮役の身体の動きに合わせて、
音の強弱をつけながら声を出してみる。
友達との一体感や共鳴し合う心地よさを感じられる瞬間も。

通常級との交流ワークショップ

通常級が特別支援学級を理解する・ケアするという視点
ですすめられることが多い学校教育の「交流および共同
学習」の時間。そうした関係を越えて、身体を動かしながら
自然なかたちで体験を共有し、表現者として対等な
関係性を紡ぐ交流の機会をつくっています。



お互いに支えあってオリジナルのポーズ

特別支援学級でワークショップをやらせてもらおうと、「この子たち、つかむのがはやいな」と感じます。こちらが何も言わなくても、私が踊ると自然と入ってきてくれたり、次にやろうと思っていた展開に先にいっていたり。想像力が豊かで好奇心が旺盛なだけに、学校生活では他の人と足並みを揃えることが苦手な場面もあるのかもしれませんが、ワークショップの場では、同じ場所に立つことや、同じ時間を共有するということが、とても大事になってくるので、むしろこちらが学んだり刺激を受けたりすることが多いです。

例えば自閉症の子はこれが苦手とか、これが得意とか、統計的に言えることはあると思うのですが、肌と肌で触れ合う中で、障害のある子もない子も、子どもたちも先生も、みんなそれぞれの質感を持っていて、一人ひとり違うっていうことを感じるんですね。だからこそ、こちらも「この子はこう」って決めつけないで関わっていききたいし、先生や子どもたちにとっても、普段とは違う関係性を紡いでいける場にできたらいいなと思っています。

入手杏奈さん（振付家・ダンサー）



© 保手演歌織

- アーティストと子どもたちは、教員が介さなくても、互いに共鳴合っていることがよくわかり、子どもたちの感性や創造性、表現が新たに引き出されている様子が見られました。
- プロのアーティストの方々は、生徒を一定の型にはめず、個性を伸ばすような指導をされており、生徒が伸び伸びと自分を表現できる雰囲気づくりや、個性を認めてあげる大切さを再認識できました。
- 普段の学校生活では見たことのない生徒たちの姿をたくさん見ることができました。特に、友達と一緒に何かしたり触れ合ったりすることが苦手な生徒が、ワークの中で自然に友達と手を合わせ、楽しそうに身体を動かしている様子には、とても感動しました。
- はじめは、自由に表現するって、どういうことなんだろう?という迷いがありました。特に自閉症の子どもたちにはモデルや手本がないと難しくて混乱するのでは、と心配でしたが、取り組みにつれ、子どもたちの力を信じることができました。

障害とは何か—— 私たちがいつも自問する問い。
“障害がある”、と言われる多くの子どもたちとの出会い。

アーティスト・ワークショップで見せる、素晴らしい表現と想像を超える発想、
そして、驚きの身体感覚。
確かに个性的であるけれども、それは悪いことではない。

むしろ、その個性とうまく付き合えていないのは周囲の人たちなのではないか。

でも、現実に通常学級で学ぶには彼らにとって何かが障壁になってしまう。
学びづらさ、居づらさを感じてしまう。

私は障害はあくまでグラデーションだと思っている。
“健常者”、と言われる人たちと地続きだし、特性ごとに混ざり合っている。
特に知的障害とか、情緒障害とか、発達障害とか、障害と健常の明確な線引きなどない。
社会全体が変わることでこれまで障害と言われてきたことが
障害と感じられなくなる日が来るのではないか。

そんなことを思わせてくれるのがアーティスト・ワークショップの時間だ。

いろんな個性が混ざり合い認められて、
何が障害で何が健常かなんて気にしない社会がいつか来ることを願ってやまない。

堤 康彦 (NPO法人 芸術家と子どもたち 代表)

ご支援のお願い

この出会いを必要としているたくさん子どもたちに
私たちの活動を届けるために、みなさんの助けが必要です。
ご支援のご協力をお願い致します。

「未来を支える」サポーターになる

月々1000円~のご支援により、事業の継続的な運営を支えてください。

サポーターのお申込み

ご寄付はウェブサイトより承ります。

- ご寄付をいただいた皆様へは、年に1回、活動報告書をお届けします。
- ご寄付の頻度は「毎月」または「3か月ごと」からお選びいただけます。

<https://www.children-art.net/support/donation/>



「芸術家と子どもたち」の活動

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたちは、
1999年に発足、2001年からNPO法人として活動を行っています。
私たちが取り組んでいるのは、
現代アーティストと、いまの子どもたちが出会う「場づくり」です。
この出会いの場が子どもたちにとって「潜在的な力を存分に発揮し伸ばす機会」
アーティストにとって「子どもたちと関わり、新たな表現を探る機会」になると考え、
主に2つの活動に取り組んでいます。

ASIAS（エイジアス）

ASIASはArtist's Studio In A Schoolの略。アーティストが小中学校（特別支援学級／学校を含む）・保育園・幼稚園等へ出向き、先生と協力しながらワークショップ型の授業を実施する活動です。2010年度には児童養護施設でも同様の取り組みを開始。以降、障害児入所施設、児童相談所、ファミリーホームなど、児童福祉に関わる様々な場に活動を広げています。近年では矯正教育の場や、小児病院、地域の子どもの居場所等でも活動を展開しています。



パフォーマンスキッズ・トーキョー（PKT）

ダンスや演劇、音楽などの分野で活躍するプロの現代アーティストを、都内の小中学校やホール・文化施設・児童養護施設などに派遣。10日間程度のワークショップを行い、子どもたちが主役のオリジナルの舞台作品をつくり上げます。最後に発表公演を行い、多くの方々にワークショップの成果を発信しています。



© 羽鳥直志

活動の様子は、公式SNSで配信中！



ワークショップの様子がわかる /

「スタッフブログ」も
是非ご覧ください





特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

〒170-0011 東京都豊島区池袋本町 4-36-1 旧文成小学校 2階

TEL 03-5906-5705

FAX 03-5906-5706

URL <https://www.children-art.net/>

mail mail@children-art.net



発行日：2025年3月 発行者：特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち デザイン：三宅理子
この冊子は、「ブリヂストン BSmile 募金」より助成いただき作成しました ※無断転載・複製を禁ず